



佐藤全孝、一年ぶり三度目のステップス個展である。毎年行なうことが定着し、毎年作品と出会いたい気持ちになるから尚更嬉しい。出会う度に変化と発見がある。初回では絵画として定義できないほどの新鮮さがあり、二回目は多様な展開を見せた。今回は上の部分の作品に見られるような、その時が来た瞬間を垣間見た気がした。佐藤は今回、赤、白、黒とまではいえない闇という、全く異なる主題の作品を出展した。この作品群は色が違うだけではなく、描き方というか意識が全く異なっている。逢う人逢う人で、佐藤の作品が話題となった。白が好き、赤が良い、闇に惹かれると、本当のことだが皆絶賛だ。

佐藤の作品が「よくなっている」のではなく、佐藤が本来の力を発揮している証拠である。佐藤がこれまで培った思索、方法、思想が噛み合ってきたのであろう。小綺麗な絵など描く必要はない。自らの人生をその瞬間に、目の前の一枚の「壁」という自己に向かって格闘するのだ。そこに他者という評価は必要としない。私は止まりながら動く白や、動き続けることが止まることに繋がる闇も好きだが、特に止まる事を知らない赤に注目した。見たことのない光景だ。私は先に「その時が来た瞬間」と書いたが、佐藤の場合、この瞬間が連続することを確信している。

